

【学名】 *Dusisiren takasatensis* ドシシーレン・タカサテンシス

【和名】 アイヅタカサトカイギユウ

進化の謎を秘めた貴重な化石。
カイギユウ化石が産出したのは、クジラ化石と同じ塩坪層の上部の砂岩からです。

ほぼ五メートル四方から頭骨、横尺骨、肩甲骨などがまとまって掘りだされました。おそらく、同じ一頭のカイギユウのものと思われる。

わが国は、欧米に比べ、発見・発掘されているカイギユウ化石は少なく、その産地はまだ一〇数ヶ所です。しかし、今回高郷から発見された化石には、頭骨など、種類を決定する上で重要な部分も含まれています。ですから、アイツタカサトカイギユウは、日本のカイギユウの進化の謎を解いたり、欧米のカイギユウと比べる上でも大変貴重な化石です。

伝説の「人魚」のモデルたち。
カイギユウ（現存するカイギユウは、ジュゴン、マナティのみ）は、クジラと同様、一生水中で生活する哺乳動物です。

アシカやトドのように休息や出産などのため、陸に上がることはありません。ですから、水中生活に適するように、体にさまざまな特徴がみられます。体は、やや太めの流線形で、前ひれが一對、尾ひれはクジラのような半月状か（ジュゴン）、扇のように後方に突き出しています（マナティ）。乳首はソウヤ人のように胸、つまり、前ひれの付け根に一對あります。

伝説の「人魚」は、このカイギユウ（ジュゴン、マナティ）の姿を、モデルにして生まれたといわれています。特に頭の部分の特徴をあげると、鼻の穴が、呼吸しやすくなるため、頭の前方で、上を向いています。また、上あごの部分、くちばしのように突き出て、口は、やや下を向いています。高郷で見つかった頭の化石も、まさにこの特徴をもっています。そのような口とそのまわりのくちびるを使って、カイギユウは、浅い海や川の底、岸にはえる草や水面に浮いている植物を食べています。

また、カイギユウは、クジラと違って、緻密で、重い骨をもっていることも特徴です。

太平洋にドシシーレンが出現。
カイギユウの進化史を、振り返ってみましょう。

カイギユウの最古の化石は、始新世の地層（ジャマイカ）から見つかっています。すでに水に適した体になっているので、先祖のカイギユウはもっと古いものと思われ、ソウの仲間とは、思われず、水平交換という、共通の特徴があるため、互の祖先は同じ動物だったと考え人もいます。

そして、漸新世には、ヨーロッパ、大西洋を中心にハリセリウムハリセリウムのなかまが栄えていました。ハリセリウムは、くちばしのように突きでた上アゴが下へ曲り、上の前歯が牙のようにはえていました。一方、太平洋では、中新世（塩坪層など）になると、ドシシーレンという新しいタイプのカイギユウが出現・生活していました。

このドシシーレンについては、あとで詳しく述べますが、太平洋だけに生息し、独特な進化を遂げ、その子孫は、人間によって捕り尽くされてしまったカイギユウです。そして、現在、生存しているカイギユウは、マナティとジュゴンのみになったわけです。

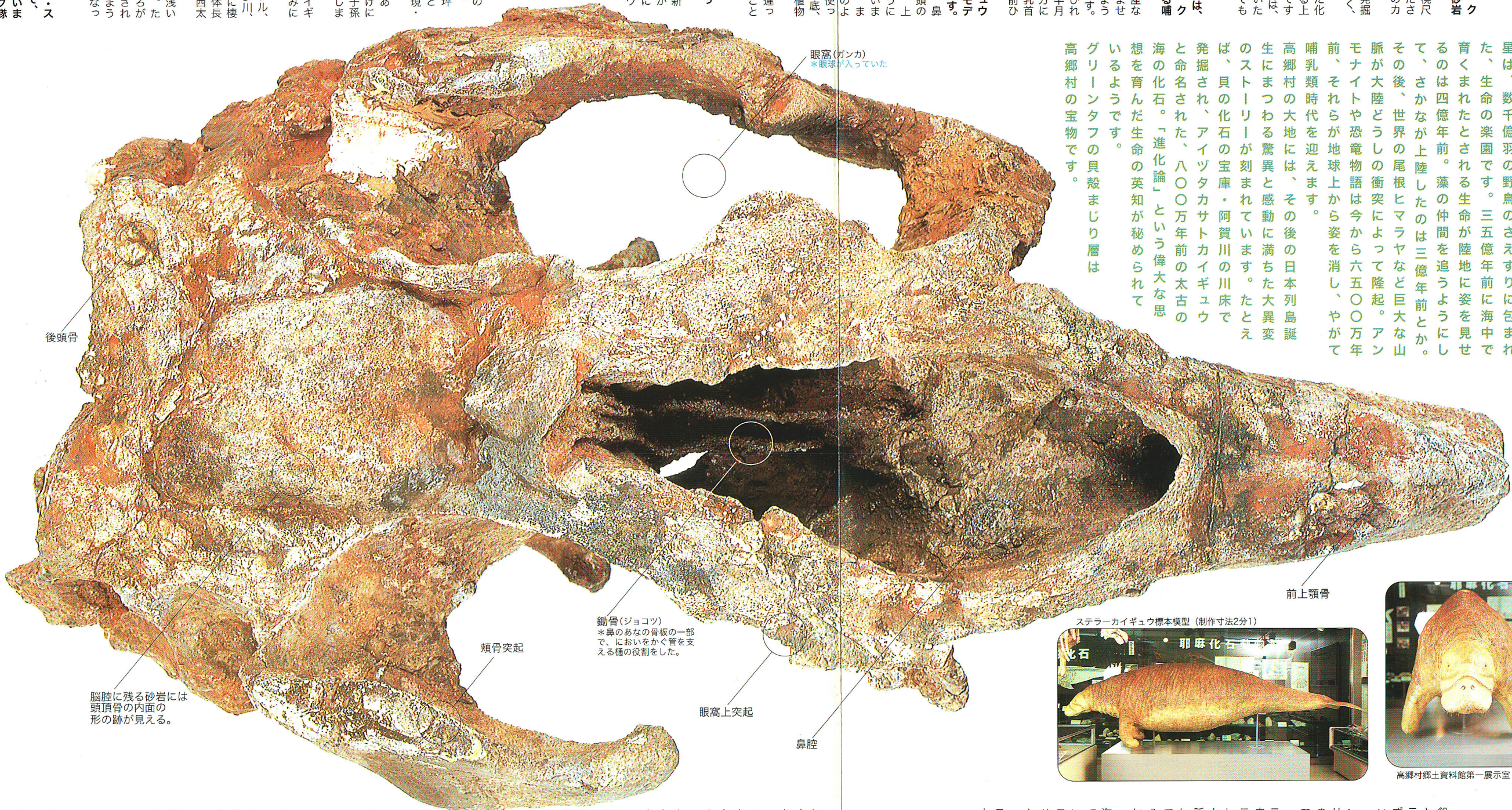
マナティは、体長約三メートル、アフリカ西海岸の海と川、アマゾン川、フロリダ沿岸の海とそれに注ぐ川に棲んでいます。一方、ジュゴンは、体長約三・五メートル、インド洋から西太平洋沿岸の海に棲んでいます。このように、いずれも暖かく、浅い海や川に棲み海草を食べています。たいへんおとなしく、攻撃的なところがない動物で、人の手によって保護されなければ、数がどんどん減ってしまふといわれ、現在、国際保護動物となっています。

福島県天然記念物指定一九九七年平成九 発見・発掘一九八〇・八二年（昭和五五・五七） 古脊椎動物学会（本部アメリカ発表一九九五年平成七）

地球が誕生して四五億年。この水と緑の惑星は、数千億羽の野鳥のさえずりに包まれた、生命の楽園です。三五億年前に海中で育かれたとされる生命が陸地に姿を見せるのは四億年前。藻の仲間を追うようにして、さかなが上陸したのは三億年前とか。その後、世界の尾根ヒマラヤなど巨大な山脈が大陸どうしの衝突によって隆起。アンモナイトや恐竜物語は今から六五〇〇万年前、それらが地球上から姿を消し、やがて哺乳類時代を迎えます。

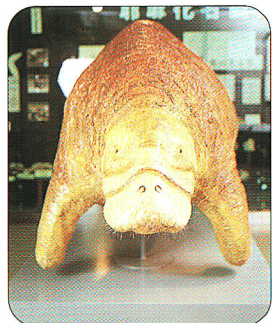
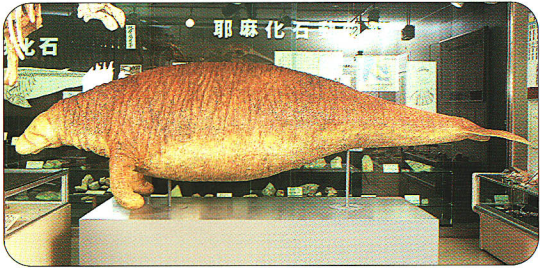
高郷村の大地には、その後の日本列島誕生にまつわる驚異と感動に満ちた大異変のストーリーが刻まれています。たとえば、貝の化石の宝庫・阿賀川の川床で発掘され、アイツタカサトカイギユウと命名された、八〇〇万年前の太古の海の化石。「進化論」という偉大な思想を育んだ生命の英知が秘められていようです。

グリーンタフの貝殻まじり層は高郷村の宝物です。



前上顎骨

ステラカイギユウ標本模型（制作寸法2分1）



高郷村郷土資料館第一展示室

長が率いる探検隊によって発見されました。

ベリンググたちの船が壊れて遭難し、飢餓に苦しみ、壊血病にかかり、やっとたどりついた小さな島の海辺に、ステラカイギユウは、人の怖さを知らずに、二十頭ほどがひっそりと生きていたのです。

そのステラカイギユウが、ベリンググ隊員を飢餓と病気から救い、ベリンググ自身は命を落したものの、多くの乗組員は本国へ帰ることができたのでした。

ベリンググ探検隊の命を救った「ステラカイギユウの話」を聞いた、毛皮用ラッコ捕りの猟師たちは、早速、ステラカイギユウを食糧として、捕獲し始めました。その狩猟からステラカイギユウを守るため、政府に保護を訴えた鉱山師のヤコブレフの声も無視しながら、冬でも捕り続けます。そして、発見からわずか二七年後、一七七八年にはステラカイギユウは皆殺しにされ、絶滅しました。

ステラカイギユウは、ベリンググ海に繁茂していた昆布をたくさん食べて、七メートルの大きな体になったといわれます。しかし、ジュゴンやマナティと異なり、歯がまったくありません。体の大きさに比べ頭が小さいことも特徴です。

高郷資料館には、今はなき、このステラカイギユウの1/2サイズの標本模型を展示しています。

「タカサト」に歯が入っていた。

このステラカイギユウなどを含む、オオカイギユウの進化史について、アメリカ・ハーワード大学の世界的なカイギユウ研究者・トムニング博士は、化石の調査から「このステラカイギユウの先祖は、何百万年の大昔には立派な歯があった」ことを明らかにしています。

鋤骨（ジョコツ）
*鼻のあなを骨板の一部で、においをかく管を支える髓の役割をした。

眼窩上突起

鼻腔

頬骨突起

脳腔に残る砂岩には頭頂骨の内面の形跡が見える。

この歯があったカイギユウこそ、前に述べた太平洋（高郷村域を含む）を中心に生息していた、ドシシーレンであるといえます。

実は、今回発見された高郷のカイギユウは、ステラカイギユウたち（オオカイギユウ）の先祖にあたる、ドシシーレンのなかまになるわけですね。

歯が退化した新しいタイプ。

そこで、アイツタカサトカイギユウの特徴を詳しく見ることになりました。

特に、歯のついている骨（歯槽突起）を中心に、詳しく調べると、

- ※歯槽が小さく、
- ※歯槽の並びかたが前後方向であること。
- ※歯のつく骨（歯槽突起）の幅が狭いこと。
- ※歯のつく骨の形が、歯がなくなつたステラカイギユウ（オオカイギユウのなかま）のものに似ていること。

などがわかります。

つまり、歯のある他のドシシーレンのうちでも、歯がさらに退化した、新しいタイプのものであることが分かりました。

福島県の天然記念物に。

そのようなアイツタカサトカイギユウの特徴が、一九九五年アメリカ（シカゴ）JLige Society of Vertebrate Paleontology（古脊椎動物学会）に発表された結果、アイツタカサトカイギユウは、学名が「*Dusisiren takasatensis*」とし、歯のついたドシシーレンが、やがて歯のないオオカイギユウにいたる進化の中で、歯がなくなる直前の、新種のカイギユウとして認められました。

アイツタカサトカイギユウは、頭骨化石の長さから、体長が約三・七メートルと推定されています。

このように、アイツタカサトカイギユウは、大変保存の良い頭の化石を含むばかりでなく、日本のカイギユウの進化史を知る上でも貴重なものであることから、一九九七年福島県天然記念物に指定されました。

会津化石研究グループ（高郷の地質と化石）から採集し高郷郷土資料館で展示、制作してからも鑑賞できます。